

宮城県文化財調査報告書第33集

金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報

昭和48年3月

宮城県教育委員会

序

名取市は、宮城県内においてとくに埋蔵文化財が密集している地域であります。昭和45年、ここに宮城県農業総合開発センターの設置が計画され、その敷地内に金剛寺貝塚・今熊野遺跡の二遺跡が含まれることが明らかになりました。

金剛寺貝塚は、県南の数少ない貝塚として著名な遺跡であり、今熊野遺跡もまた事前調査の結果、わが国最大の縄文前期の集落と北限の方形周溝墓を含む縄文時代から平安時代に亘る大集落の存在が確認されました。

このたび、これらの遺跡の東北古代史上にもつ意義が広く認識され、関係各方面の深いご理解とご努力により現状のまま後世に保存することになりましたことは、文化財保護の立場からご同慶にたえないところであります。

古代人の足跡はこれらの遺跡にのみしるされたものではありませんし、遺跡の性格も県内各地に眠る多くの埋蔵文化財との有機的な関連で初めて正しい姿が与えられるものであります。その意味では両遺跡の保護はまだその緒についたばかりであると言えましょう。調査概報の刊行にあたり、この小冊子が遺跡の理解と埋蔵文化財の保護に少しでも益するところがあれば幸と存じます。

最後に、2年にわたる長期の調査にもかかわらず終始ご尽力をいただきました関係各位に対し、心から感謝の意を表するものであります。

昭和48年3月

宮城県教育長 津軽芳三郎

目 次

I.はじめに	1
II.位置と環境	3
III.金剛寺貝塚	7
遺跡の概要	9
IV.今熊野遺跡	11
調査経過	12
調査概要	15
縄文時代	16
縄文時代前期の集落	16
住居跡	20
土塙	24
包含層	25
出土遺物	26
弥生時代	28
古墳時代前半	29
方形周溝墓群	29
住居跡	32
集落と古墳	34
鴻ノ巣古墳群	36
古墳時代後半	38
歴史時代	41
V.まとめ	44

例　　言

1. 本書は宮城県農業総合開発センター建設工事に伴う金剛寺貝塚試掘調査、今熊野遺跡発掘調査概報である。

2. 調査期日

金剛寺貝塚	昭和46年1月5日～1月15日
今熊野北台地区第一次	昭和46年10月22日～昭和47年2月9日
今熊野鴻ノ巣地区	昭和47年2月28日～10月16日
今熊野北台地区第二次	昭和47年3月28日～7月1日

3. 遺物整理がまだ終了していないので本書では主に遺構を中心にその概略を記するにとどめた。

4. 調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室調査係

志間泰治・氏家和典・藤沼邦彦・白鳥良一・佐々木安彦・岩渕康治・小井川和夫・佐藤庄一・加藤道男・丹羽茂・三浦圭介・齊藤吉広・熊谷幹男・田中則和・遊佐二郎・加藤貞子

5. 調査及び整理において次の方々と機関からご指導、ご助言を賜った。（敬称略五十音順）

伊東信雄・大塚初重・岡田茂弘・小野力・加藤孝・興野義一・小林達雄・後藤勝彦・坂田泉・佐藤巧・庄司貞雄・芹沢長介・高橋富雄・林謙作・東北大学工学部・東北大学農学部農学科農学立地学研究室・東北大学文学部考古学研究室・多賀城跡調査研究所

6. 調査参加者（所属は参加当時）

東北大学文学部考古学研究室	林謙作・八巻正文・福田友之
宮城教育大学考古学研究会	土岐山武・千葉宗久・太田昭夫
東北学院大学考古学研究部	中村光一・阿部正光・橋本博幸・佐藤正人・清水毅・高橋勇治・宍戸宏和・田中礼子・佐藤房枝・大槻良子・齊藤真澄・門間敦子
山形大学教育学部	穂積里志

宮城県多賀城跡調査研究所

秦昭繁

山形県米沢市

7. 本書の執筆、編集は宮城県教育庁文化財保護室調査係があたり、石器実測において秦昭繁君の協力を得た。また遺跡の分布状況については、太田昭夫君の教示が大きい。

I はじめに

仙台市東部にある県農業試験場は、周辺の市街化によって、年々その機能が低下してきていたため、昭和41年、新たに県農業総合開発センター建設の構想が打ち出され、その適地として名取市西部の高館川上地区が選定された。この中には、金剛寺貝塚・今熊野遺跡等が含まれていたが、この時点では事前協議は行なわれなかった。43年12月、金剛寺貝塚の一部を削ってセンター本館の建設計画がなされたが、話し合いの結果、遺跡の部分を計画から除外することで同意が得られ、46年1月範囲確認の調査を行い、それに基づいて本館の位置を移動することになった。その際、今熊野遺跡は記録保存の処置にという要望があった。ここは古くから石器等の出土は多いが土器は少なく、遺跡の内容を把握する必要があるため10月から調査を開始した。その結果、遺跡の約10程の発掘で縄文前期の集落、古墳時代方形周溝墓などが発見されて、遺跡の重要性が見直され、また保存に対する世論も高まり、北台地区は現地形を変えずに利用することになった。一方北台地区を横断する幹線道路の建設と鴻ノ巣地区は実験圃場として使用するとのことでさらに発掘が進められたが、道路敷内から再び多くの遺構・遺物が発見され、鴻ノ巣地区から方形周溝墓と古墳・平安期の100軒余の住居跡が発見されるによんで、両地区は一連の遺跡であり、保存すべき遺跡として関係各方面の協議の結果、知事の裁決によって全域保存の決定をみた。このように多くの曲折を経て保存と決ったが、今後は、この地を長く後世に伝え、整備を加えて公開活用を図ることが残された課題といえる。



遺跡遠景(那智神社より)



道路の位置 1. 金剛寺貝塚 2. 今朝野遺跡
国土地理院発行 仙台・岩沼 (5万分の1) 図幅
(承認番号) 第48. 第6126の3



周辺の地図

II 位置と環境

名取市は、仙台市の南隣り、人口約4万の小都市で、西側は遠く藏王山系に連なる標高200m前後の準平原的丘陵地帯がひかえ、東側は、その丘陵をぬって東流してきた名取川と、阿武隈山系に源を発し、ゆるやかに蛇行して北流してきた阿武隈川とが、市の南北で開析して形成した名取平野が開けて、広い仙台平野の南端をしめている。西部丘陵は杉、雜木などの山林地帯で、多種多様の鳥獣類が生息し、この丘陵を背後にもつ比較的おだやかな気候のもとで、標高20~30m前後の低丘陵地帯では、野菜・園芸作物を主とする畑作が盛んに行なわれ、加えて沖積平野は、両河川のもたらすゆたかな水利と、肥沃な大地を条件に黄金の稲穂が波うち、東北屈指の穀倉地帯である仙台平野の一翼を担っている。さらに平野の東端、太平洋を臨む海岸線に沿っては、江戸時代以来の松並木が連なり、防潮・防砂林としての機能と同時に、海岸部の自然環境の温存に大きな役割を果している。このような、のどかな田園風景の反面、一たび目を転ずるとそこには人口の急速な都市集中の影響で、この地域も例外ではなく急激に宅地化の波が押し寄せ、かつて奥州街道沿いの宿場町として栄えたのと同じように、現在もまた大小の団地、住宅が林立し、仙台市のベッドタウン的様相を強くしてきており、景観は急速に変貌しつつあるという一面がある。

さて、市西部まで延びてきた丘陵は、高館地区で標高50m前後の三つの小丘陵にわかれ。北から、箕輪丘陵・野田山丘陵・賽ノ崖丘陵がそれである。箕輪丘陵はさらに北へ金剛寺台地を分岐させ、賽ノ崖丘陵は東へ延び、愛島・小豆島丘陵を経て飯野坂丘陵に至る。これら丘陵に沿って縄文時代から各時期に至る数多くの遺跡が認められる。殊に人々が農業に従事するようになる弥生・古墳時代の遺跡が多く、その当時からこの沖積平野は人々の注目するところであったことが知られる。

名取市内において、今のところ旧石器時代にさかのぼる遺跡は発見されていない。最も古いものは、今熊野遺跡における縄文時代早期中葉の押型文土器片で、約8,000年前に遡る。早期の遺跡は市内では、まだ数は少なく、規模も小さい。前期になると今熊野北台地区に代表されるような大集落が営まれ、また、ほぼ同じ時期の宇賀崎貝塚等が形成され、人々の生活のあとがうかがわれる。これに接続する時期の遺跡としては、中期末葉の山崎南貝塚や後・晚期の金剛寺貝塚がある。時期を異にするこれらの遺跡が一ヵ所に集中せず、市内各地に散在することは、集落の移動などを暗示していると思われる。

弥生時代の遺跡としては、今熊野遺跡の他に十三塚遺跡・雷神山古墳周辺などが知られている。これらの弥生集落は、農業の開拓による土地への定着と経済生活の自立性を含むものであり、以後の自然村落形成の礎であるといえよう。

古墳時代においては、農業技術の進歩と普及と生産性の向上などにより、階級の分化が成立し、その結果、支配者は、今熊野方形周溝墓を経て、飯野坂・宇賀崎・箕輪古墳群の地方豪族へと

成長し、それらを統合するような形で雷神山古墳の出現に至る。

古墳時代末期においては、小豆島横穴群・熊野堂横穴群などが知られている。

奈良・平安時代には、名取地方も律令的支配体制のもとに完全に組み入れられ、名取郡の建置、条里制の施行などが行われる。上余田、笠島に「市の坪」の地名が残っていて条里の名残りをとどめるが、おそらく名取平野全域に条理制が施行されていたと見てよいだろう。この時期の集落跡は正式調査例こそ少ないが、市内のいたる所に存在する。一方、笠島廃寺跡などは人民支配階層の存在を物語る。

中世においても、従来の自然村落を軸とした地域形態のもとに武士団が成立する。高館城をはじめとする各地区的城館址も従来の自然村落の支配のもとに成立したものであった。

弥生時代において成立した自然村落は、おおすじとしてはほぼ近代にまで引き継がれ、各時代における社会体制の根幹をなしてきた訳だが、これほどの長期に及んでこうした自然村落が存続したのは、結局は優秀な水利を背景とした農村基盤の存在があったからといってよいだろう。

参考文献

伊東信雄 「宮城県古代史」 宮城県史1 (昭和27)

加藤 孝・新野直吉 「陸奥国多賀城高崎廃寺址の研究」 歴史11 (昭和30)

周辺の主要遺跡

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|--------------|
| 1. 金剛寺貝塚 | 3. 高館山古墳 | 11. 箱塚古墳群 | 19. 宇賀崎貝塚 |
| 2. 今熊野遺跡 | 4. 南台窯跡 | 12. 飯野坂西遺跡 | 20. 慶雲院横穴古墳群 |
| a. 北台地区 | 5. 笠輪B地区古墳群 | 13. 飯野坂古墳群 | 21. 小豆島横穴古墳群 |
| b. 鴻ノ巣地区 | 6. 西野田遺跡 | 14. 雷神山古墳 | 22. 南小袋石遺跡 |
| c. 南台地区 | 7. 賽の崖古墳群 | 15. 小塚古墳 | 23. 大木戸貝塚 |
| d. 鴻ノ巣1号墳 | 8. 泉遺跡 | 16. 宇賀崎古墳群 | 24. 八幡遺跡 |
| e. " 2号墳 | 9. 笠島廃寺跡 | 17. 五郎市遺跡 | 25. 清水遺跡 |
| f. " 3号墳 | 10. 十三塚西遺跡 | 18. 宮下遺跡 | 26. 上余田遺跡 |

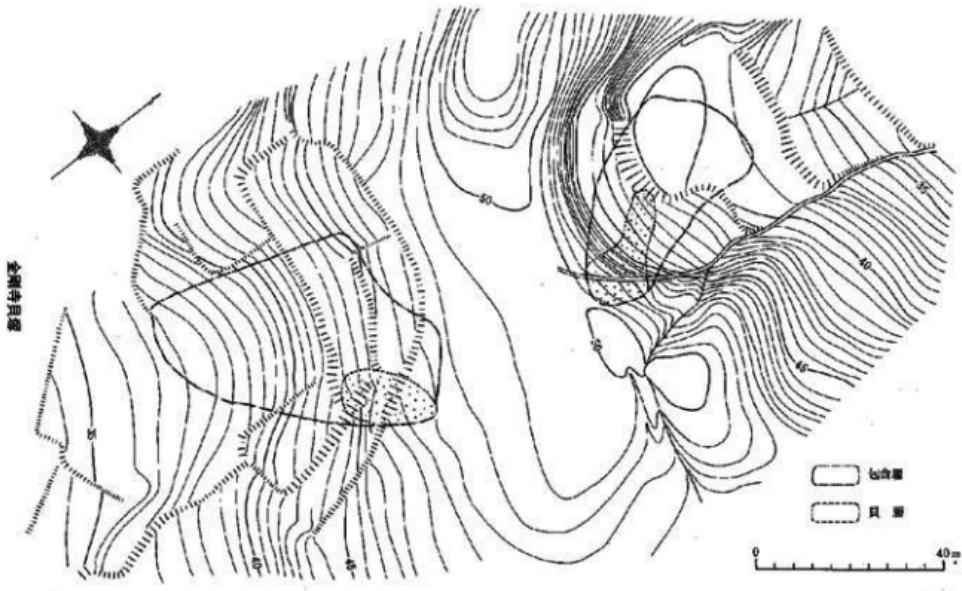


高越山古墳



南台墓跡

III 金剛寺貝塚



遺跡の概要

東北地方南部の縄文時代後期（注1）の標準遺跡として有名な金剛寺貝塚は名取市高館字川上東金剛寺の南側を西から東に延びる標高約50mほどの小さな台地上につくられている。遺跡の東約200mにある今熊野遺跡とは谷をはさんでもかいあっている。この遺跡は研究者の間では古くから注目されており、昭和22年に宮城師範学校によって発掘調査が実施されている。

昭和46年県教育委員会は、遺跡の性格と範囲を調べるために試掘調査を行なった。その結果台地の南北両斜面に貝層が見られ、その外側に新しく縄文晩期中葉の遺物包含層が広がっていることがわかり、さらに両貝層間にさまれた台地上の平坦面には、柱穴が発見され住居跡の存在も予想された。このような遺跡の構造は縄文時代の貝塚を伴う集落の最も典型的な姿（注2）であり、その意味でも金剛寺貝塚は縄文文化の研究上きわめて重要な遺跡と考えられる。

遺跡は8,000m²の面積をもつ大規模なもので、貝層の部分は南側が約150m²、北側が約250m²で貝層の厚さは約80cmである。

貝塚は近くの集落から捨てられた貝殻や骨などの食べ滓、こわれた器物などが堆積してきたものである。したがって貝殻の分布状況から集落の場所や規模の推定が可能であり、また捨てられた貝や、貝の成分の作用によって、ふつうは腐敗して残らない獸魚骨なども良好に保存されるため、当時の食生活の内容や周辺の自然環境を知ることができるなど古代人の生活を復原する上で重要な役割をはたす。

金剛寺貝塚については昭和22年の宮城師範学校による北側貝層の発掘調査によってその内容を知ることができる。貝層を構成する貝は、アサリ・シジミが主体を占め、その中にハマグリ・アカガイ・クボガイ・ウミニナなどが混入している。このことから現在10km東にある海岸線は当時遺跡のかなり近くまで来ていてであろうと推定される。また貝層中からはマグロ・クロダイ・フグなどの魚骨やクジラの骨などと共に、動物の骨や鹿の角で作った釣針・鉛、土製の網のおもりなどの漁具が出土しており、漁撈による食料の確保が盛んであったことをうかがわせている。さらに石鎌（石のやり）や石匙（石でつくったナイフ）などの狩猟具とシカやイノシシの骨が多数発見され、狩りの生活も行なっていたことが知られる。また食物を煮たり貯蔵したりするために用いられた土器、石斧（オノ）・石錐（キリ）・くぼみ石やたたき石（食物の実や根などを割ったり、すりつぶしたりするのに使われたと考えられている）などの生活用具や、土製の耳飾・アカガイ製の貝輪（腕輪）などの装身具類なども発見された。

土器は発見された遺物のうちで最も量が多く、その大部分は破片となって発見された。縄文時代前期（大木1式、約6,000年前）のものが少数見られるが、大部分は後期～晩期（約3,000年前）に属するもので、土器の表面につけられている文様や器形に種々のバラエティがある。特に後期末とみられる一群の土器は金剛寺式土器として東北地方、縄文後期の時代区分に使用されており、考古学上貴重な資料とされている。

その他貝層の中から人骨と埋葬された犬の骨一体分が発掘されている。人骨は当時この貝塚を営んでいた集落の一員が死後貝塚の中に埋葬されたものと考えられる。死者を貝塚に埋葬する例は縄文社会全体を通じて一般的に行なわれている。また犬は縄文時代から狩猟に利用されており、その死骸は死者と同様手厚く葬られたものとみられる。

以上のように金剛寺貝塚は縄文社会のいろいろな問題を解明する上で重要な遺跡である。

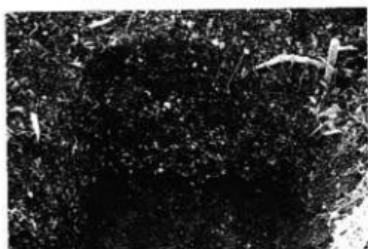
注1. 縄文時代は約8,000年間続いたが、発見された土器などの違いによって大きく早期・前期・中期・後期・晚期の5期にわけられ、さらにその中も細分されている。

注2. 古地図はさんで南北両斜面に貝層が見られることから、従来この貝塚は2つの貝塚と考えられ、南側が金剛寺西貝塚、北側が金剛寺貝塚と呼ばれてきたが、これは本来1つの遺跡と理解した方が自然であろう。

参考文献

伊藤信雄 「宮城県古代史」 宮城県史1 (昭和27)

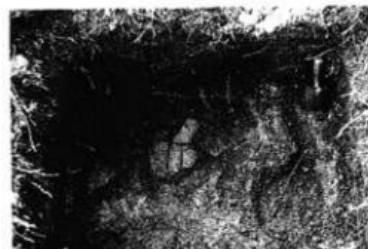
後藤勝彦 「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究」 宮城県の地理と歴史2 (昭和35)



貝層



柱穴



土器出土状態



出土土器

IV 今 熊 野 遺 跡

調査経過

今熊野遺跡の調査は、昭和46年10月22日に始まり、北台地区の第1次、第2次調査、鴻ノ巣地区の調査と断続的に続き、昭和47年10月16日に全作業を完了した。

北台地区第1次調査—調査はまず北台地区全体に3m方眼のグリッドを設定し、遺跡の範囲を確認することから始めた。その結果、台地中央部よりも東側斜面に遺構、遺物が多く発見され、竪穴住居跡と、方形周溝墓が確認されるに至り、北台地区全体の調査は一応中止し、遺構、遺物が最も集中する部分約1,000m²の精査を行なって第1次調査を終了した。

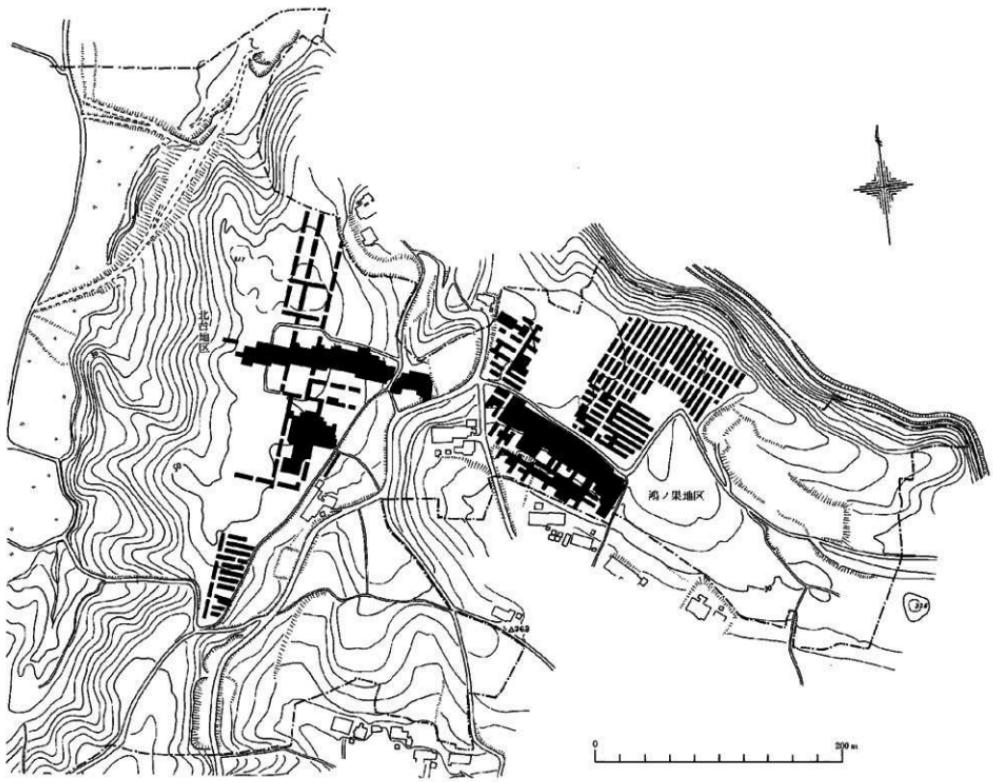
北台地区第2次調査—第2次調査は、遺跡内に建設されることになった幹線道路の敷地約2,900m²について行った。第1次で調査外だった部分が大半で、東斜面で竪穴住居と方形周溝墓を発見した以外に、中央部では多数の土塙を、西斜面では遺物包含層を新たに確認した。

鴻ノ巣地区の調査—北台地区第1次調査と同様遺跡の範囲を確認するため南側斜面より調査を始めたが、この斜面だけで住居跡59軒、さらに中央平坦部では方形周溝墓2墓と、100軒を越えると思われる住居跡を確認した。このため地区全体の調査は中止し、住居跡18軒の精査にとどめ、他の大部分は保存のため埋め戻しを行い、将来の研究に委ねることにした。

この間、3回の現地説明会を行った。第1回は北台地区第1次調査で昭和47年1月8日に、第2回は同第2次調査で6月11日に、第3回は鴻ノ巣地区調査で8月11日に行った。



発掘風景(1号方形周溝墓)



今郷野道路グリッド配置図

調査概要



今熊野遺跡北台地区(州より)

今熊野遺跡は、全面積約 97,000 m²ある。このうち発掘調査した面積は、北台地区の第一次調査で約 3,200 m²、第 2 次調査で約 2,900 m²、鴻ノ巣地区の調査で約 9,100 m²、合計約 15,200 m²に達する。調査の結果、縄文時代から弥生時代、古墳時代、歴史時代にまたがる多くの遺構、遺物が発見され、特に縄文時代前期の大集落と東北初の方形周溝墓の発見は注目される。

縄文時代では北台の東斜面より前期初頭の住居跡が 59 軒発見され、西斜面にはほぼ同時期の遺物を出土する包含層が 2ヶ所に確認された。また北台中央部より、前期と晚期の土塙が約 40 個発見された。弥生時代のものは、鴻ノ巣地区中央部より住居跡が 2 軒（未調査）、他に土器・石器等の遺物が北台・鴻ノ巣両地区より少量づつ発見された。古墳時代の遺構、遺物は、前半と後半とに大別される。前半では台地上から 9 基の方形周溝墓と鴻ノ巣地区より住居跡 3 軒、後半では北台地区より住居跡 6 軒、鴻ノ巣地区より 2 軒発見されている。歴史時代のものは鴻ノ巣地区で住居跡が 2 軒のみ発見され、この中の 1 軒より銅鏡が 1 点出土している。

本遺跡は未調査の区域が大部分で重要な遺構、遺物の存在が推測され、将来の研究に俟たれることが多い。

縄文時代

縄文時代前期の集落



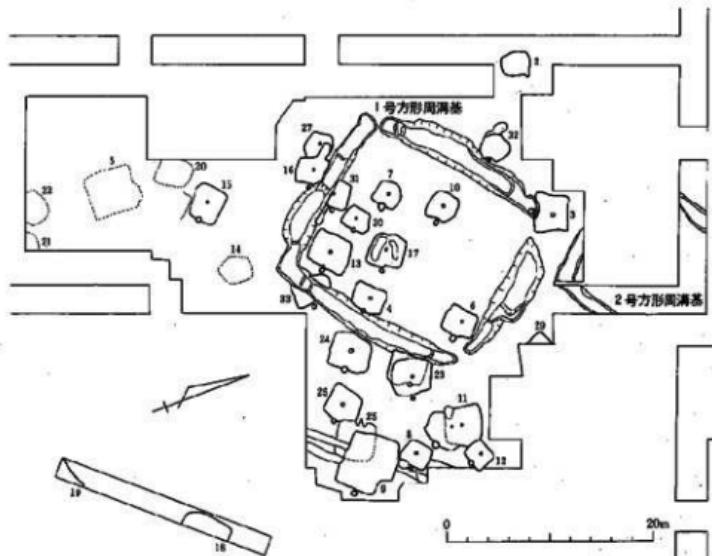
北台地区第1次調査

縄文前期の遺構、遺物は北台地区から発見され、鴻ノ巣地区にはみられなかった。この時期の人々の生活は北台地区を中心としたものであったことが知られる。

北台地区は南北にのびる標高約50mの細長い台地で面積はおよそ40,000m²ある。台地上にはかなり広く平坦な部分があり、東斜面は比較的なだらかであるが、西側は急な傾斜で谷になっている。住居跡は東斜面に集中しており、中央平坦部からは検出されなかつた。また西斜面には多量の土器・石器を含む遺物包含層が認められた。

住居跡は59軒（第1次調査33軒、第2次調査24軒）発見されたが、これらの中には2~3軒の住居が重複しているものがみられ、すべての住居が同時に存在したものではないことを示している。拡張したと考えられる住居も1軒ある。また方形周溝墓や古墳時代・平安時代の住居跡など後世の遺構によってこわされているものも多い。

住居が営まれた年代は一緒に発見された土器からみて、縄文時代前期の初頭（大木1式～大木2a式、約6,000年前）と考えられる。



遺構配置図(北台地区第1次発掘部)

縄文時代前期という時期は、気候が温暖になって食料も豊富になり、それまで用いられていた尖底土器が平底へ変化することからもうかがわれるよう、人々の生活がようやく安定し、大きな集落が形成されはじめた時期にあたる。

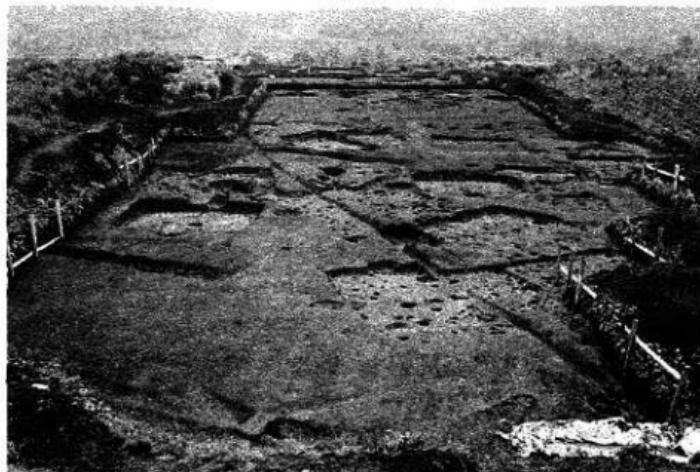
住居跡の分布状況から、北台地区には、まだ多数の住居跡が存在することは確実とみられ、縄文時代前期のものとしては、いまのところ我国最大の集落となつた。

ほほ同時代と考えられる横浜市南堀貝塚の例では、馬蹄形の台地の縁辺に住居跡が発見され、中央の平坦部には、住居跡はないが、石皿や火焚場がみられ、集落共同の広場としてつかわれたとみられている。

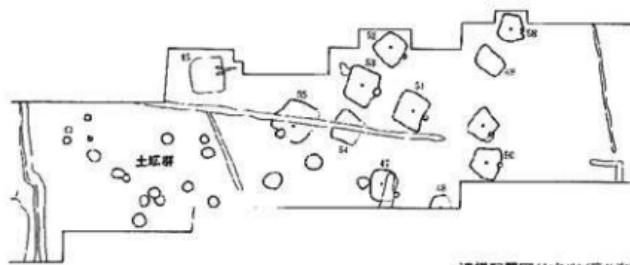
北台地区でも、台地全体の調査ではなかつたが、場所によって使い分けがされていたことが指摘できる。まず住居は台地の東縁辺部に密接して配置されており、中央部の平坦部にはみられない。おそらく、集落の広場として、まつりなどの場合集落内の全員によって使われていたものであろう。また集落内で使われ、不要になった器物（土器や石器など）は台地の西斜面に乗てられ、それが遺物包含層として厚く堆積している。遺物包含層も大木1式と大木2a式とでは場所が異なつている。

このように、ひとつの台地内で住居地域・広場・遺物包含層地域（ごみすてば）などの使いわけがなされており、集落を形成する場合には、決して無秩序に行われるのではなく、そこには共同体の規制が強く働いていたことをしのばせる。今回明確にはできなったが、墓域などもおそらくこの規制の中に含まれるものであろう。

この台地における縄文時代の集落は前期初頭の大木1式期に出現し、大集落が営まれたが、



北台地区第2次調査

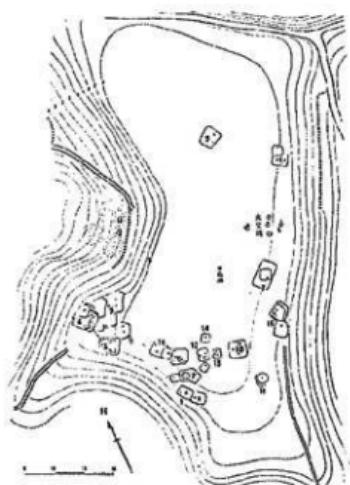


遺構配置図(北台地第2次)

大木2a式期で廃絶している。

なお、約3km南に、(ほぼ)同時期と考えられる宇賀崎貝塚がある。住居跡は検出されなかったが、アサリ・シジミを主体とする貝層が、良好な状態で遺存していた。

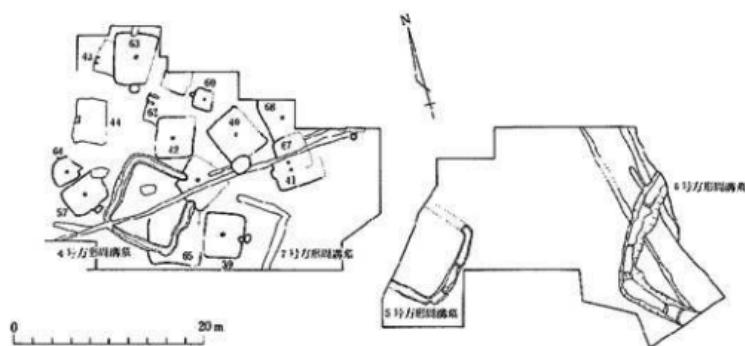
参考文献 和島誠一「横浜市史」第一巻 原始時代 (昭和33年)



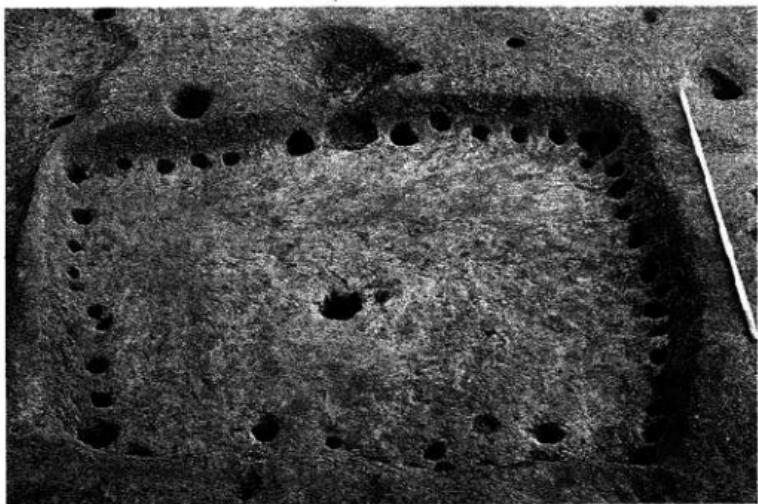
南掘貝塚住居跡群 (横浜市史)



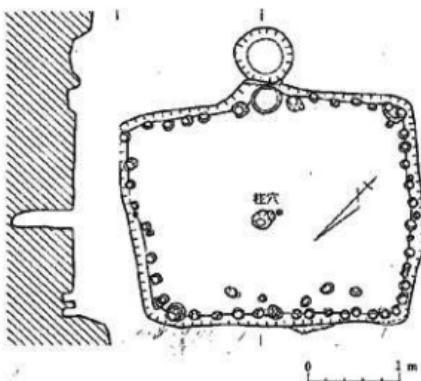
宇賀崎貝塚



住居跡



北台6号住居跡

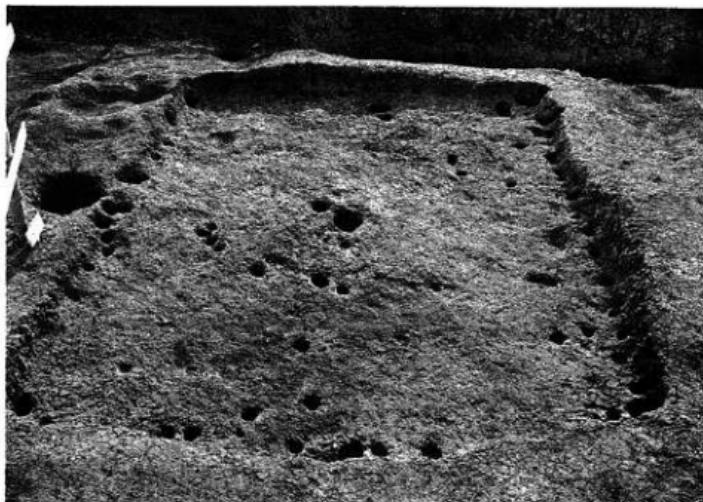


北台6号住居跡

人間の生活を考える場合、衣食住を無視することはできず、ことに住居は、活動の中心となる重要な場所である。

縄文時代の住居は、竪穴住居がほとんどで、まれに平地住居・敷石住居(石を敷きつめて床面としたもので、最近は竪穴住居の一形態と考えられるようになつた。昭和47年白石市菅生田遺跡で発見されたものは現在のところ北限であり、注目されている。)などがあり、また自然の洞穴や岩蔭を利用することもあつた。

竪穴住居は、地面を一定の形に40cm~1m位掘り下げて、壁と床をつくり、その土に屋根をかけた住居で



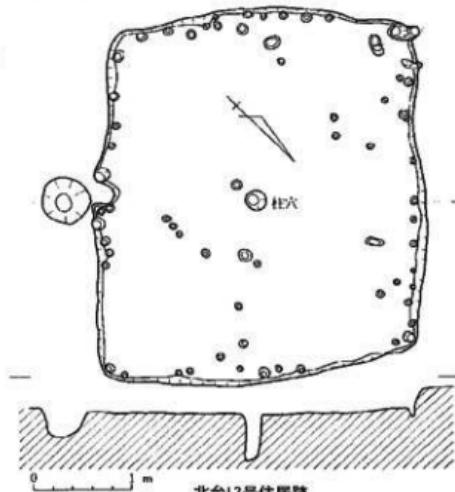
北台13号住居跡

あるが、上部構造は腐朽してほとんど残らない場合が多い。調査の際は、下部構造、つまり竪穴の部分だけが発見される。

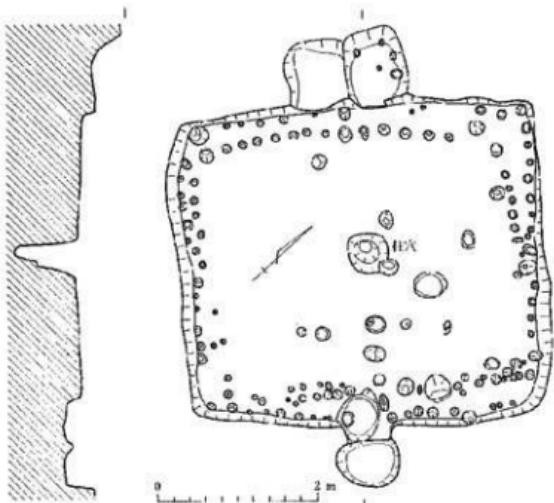
これらは、時期、地域によって規模や形状の違いがある。縄文前期では、平面形が正方形や長方形のものが多い。

今熊野遺跡では、北台地区の東斜面より前期初頭の竪穴住居跡が59軒発見されたが、それらには次のような共通した特徴が見られる。

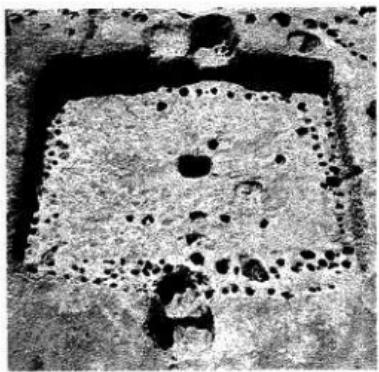
1. 平面形は長方形を基本とするが、ゆがんだ形のものが多い。
2. 規模は一辺が約4m前後のものが多い。



北台13号住居跡



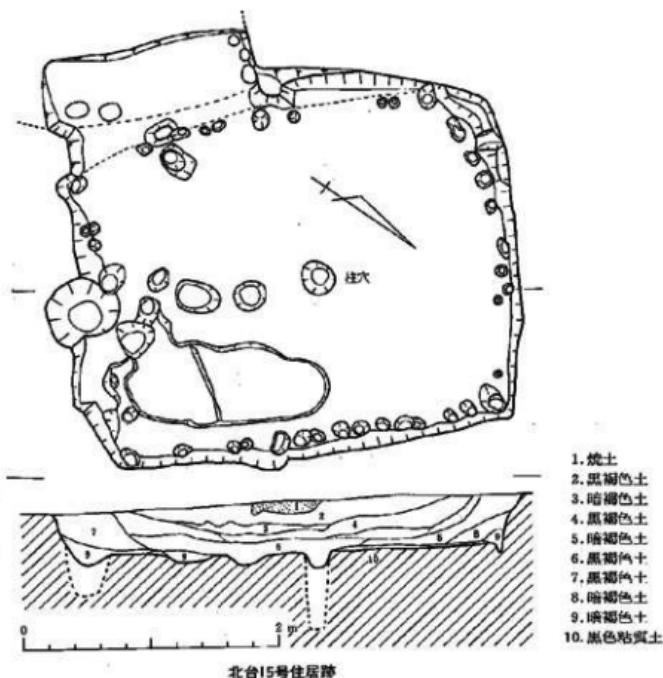
北台39号住居跡



北台39号住居跡

3. 中央部に1個の深い柱穴がある。
4. 壁の下には多数の小穴がめぐり、四隅のものは深いことが多い。
5. 東辺中央部には2個1対に深めの小穴がみられることもある。
6. また、そのすぐ外側、住居に接して直径50cm前後の円形の掘りこみがある。
7. 床面は堅くしまっており、さらにその上に粘土を貼っている場合もある。
8. 住居内に炉の施設はみられない。

これらの住居跡は、縄文前期初頭のものではあるが、重なりあっているものがあることからすべてが同時に存在したものではない。また柱穴などの配置や規模の点で拡張したと思われる住居が軒み



られた（北台39号住居跡）。住居の拡張例は、他遺跡にもみられる。埼玉県上福岡遺跡では、前期の竪穴住居跡に数回にわたって拡張していることが確かめられており、その原因としては家族員の増加が考えられている。（上福岡遺跡では1回の拡張の平均面積は 3m^2 である。）また、住居の面積と家族員数の関係については、千葉県姥山貝塚で1つの住居跡から5体の人骨が発見され、その1人あたりの面積は 2.4m^2 であることから、 $2\sim3\text{m}^2$ を一人の所要面積と考える説もある。廃棄された住居は、上部構造がくずれ、竪穴内に土砂が流入する。土砂は壁近くから次第にうまり何枚かの層にわかれる。今熊野遺跡ではこの層位の観察によって、住居東側の掘りこみが住居に伴うものであることが確認された。また、多くの場合住居跡の埋土上部に焼土がみられ、住居内の炉がないことと関連して興味深い。

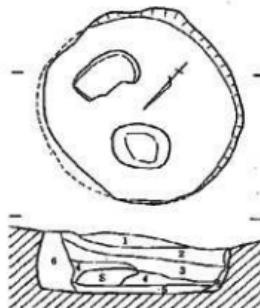
主要参考文献 関野克「埼玉県福岡村龍文前期住居跡と竪穴住居の系統について」 人類学雑誌53-8
(昭和13年)

松村眞・八幡一郎・小金井良精「下総船山に於ける石器時代遺跡」 東京帝国大学理学部人類学教室研究報告5 (昭和17年)

土塁

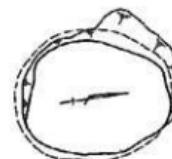


土塁群



北台18号土塁

- 18号土塁
1. 黄褐色燒土
2. 暗褐色土
3. 削高褐色土
4. 暗褐色燒土
5. 暗黃褐色燒土
6. 黃褐色燒土



北台26号土塁

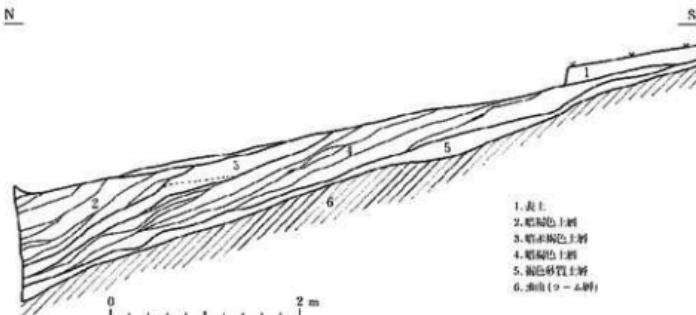
- 26号土塁
1. 黄色土
2. 灰褐色土
3. 灰褐色土
4. 白褐色土
5. 暗褐色燒石層
6. 暗褐色燒石層
7. 黄褐色土



発掘調査によって大小約40個の土塁が発見されている。縄文時代前期の住居跡群とは範囲を別にし、とくに北台地区の平坦部に集中して分布する。土塁作られた時期は大きく縄文時代前期と晩期に分れるが、さらに各時期によって土塁形態や伴出遺物が異なるようである。

平面はほとんどが円形ないし梢円形であるが、前期初頭の土は口径が大きく、壁が内湾気味に立上がる。(18号土塁)埋土上部に焼土を持つものが多く、住居跡群に近接する。前期後半のものは小形で、中からクリ・クルミなどの炭化物が出土した。晩期中葉の土塁は、袋状で(26号土塁)晩期終末のものは外傾するが、いづれも一括土器が出土した。土塁の用途としては、埋葬施設や貯蔵穴などが考えられるが、その性格や用途についてはなお検討が必要である。

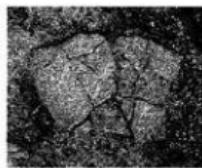
包含層



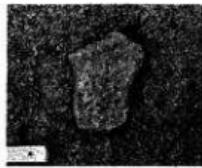
遺物包含層断面図



土器出土状態



土器出土状態



土器出土状態

当時の人々が捨てた不要の生活用具や食べ津などが土に混じつて堆積したのが遺物包含層である。集落近くの凹地や斜面を利用する場合が多い。多量の貝殻を含んだ貝塚（宇賀崎貝塚）や、低湿地に形成されてできた泥炭層も遺物包含層の種類である。いずれも長年にわたって形成されたため、何枚かの層となって堆積する。従って、普通は古いものが下に、新しいものが上になるので出土遺物の相対的な年代を決定するのに貴重な役割を果す。

北台地区では住居跡群とは反対の西側の急斜面に遺物包含層が2ヶ所発見され、今回は北側の一部（約6×12m）を発掘した。包含層は表土下の第2層から第4層まで3層にわかれし、第5層以下は地山である。

第2層からは土器片が多量に出土したが、一括土器はない。

他に骨片・オニグルミが出土し、焼土・木炭粒がみられた。

第3層は間層的で、少量の土器片および、焼土・木炭粒がわずかにみられたにすぎない。第4層からは復原可能な一括土器が多数出土し、他に木炭がみられる。出土した土器はいずれも縄文前期大木I式に属するものである。

また、南側の包含層は大木2式の土器が多いので、ここでは、堆積の上下関係よりも地点によって年代差が考えられる。

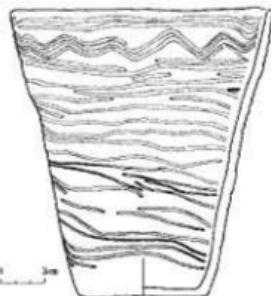
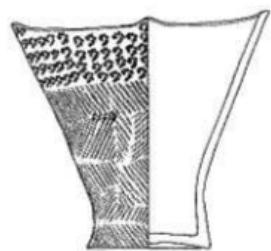
出土遺物

縄文前期の遺物は土器・石器でその量はおよそダンボール30箱分である。

土器は食べ物を煮たり貯蔵したりするのに用されていたもので出土遺物の大部分を占めている。その特徴としては①形は単純な深鉢形を示す。②表面にさまざまに工夫された縄目の文様や竹べらなどによって描かれた文様がつけられている。③粘土に植物の纖維を混入していること、などがあげられ、これらの土器は考古学上大木I式および大木2a式と呼ばれているものである。

石器は種類、量ともに豊富であり、作りも非常に精巧で、当時今熊野の集落ではシカやイノシシなどを対象とした狩猟が盛んに行なわれていたことが推定される。石器の材料としては頁岩が多く用いられている。出土した石器には石鎌・石槍・石匙などの狩猟用具や大小の石斧・石鎧・石皿・凹石・すり石などの生活用具がある。また石製の玦状耳飾や管玉など、装身具類も発見された。

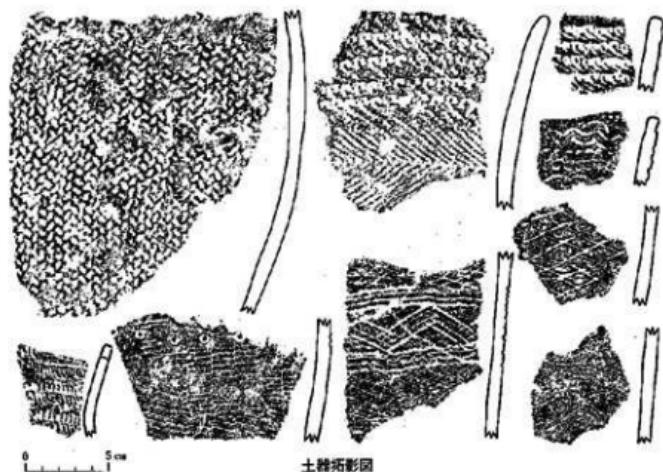
その他大木2a式期の土偶が2点出土している。一つは女性を形どったもので、頭部と脚部は欠けている。共同体の生活の中でまじないなどに使われたものであろう。



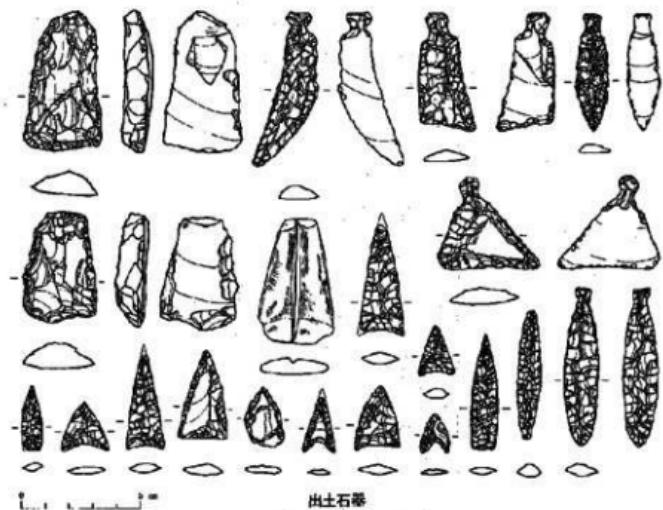
出土土器



出土土器



土器拓影图



出土石器

弥生時代

狩獵や漁撈など自然物を採ってくらしていた縄文時代の社会は、朝鮮や中国などの大陸文化の影響を受けながら、水田稲作を基礎とする弥生時代の社会に発展してゆく。鉄器の使用もこの時代からはじまり、木製農具やその他の木器製作などに重要な役割を果す。東北地方では前期にあたる文化がなく、中期になってから稲作の開始を示す資料が現われるようになる。

今熊野遺跡では、弥生時代後期（2～3世紀）にあたる時期の遺構や遺物が発見されている。堅穴住居跡と思われる遺構の輪郭を2軒分、鴻ノ巣地区の中央部より確認したが、この段階で遺跡の保存が決定したため、ただちにうめもどし、保存をはかった。したがって詳細は不明である。また北台地区からも土器や石器などの遺物が出土していることを考えると、今熊野遺跡には、この時期の集落が一定の範囲をもって存在していることが予想される。

米つくりの技術はまだ低く、沖積平野や河川の低湿地を水田に利用し、木製のクワやスキなどで耕作したものと考えられる。本遺跡から穂積み用の石包丁が2点出土している。

出土した土器には、壺・甕・鉢などがあり、それらの幾つかには半截竹管や先の鋭い施文具による孤文・渦巻文・刺突文などが施されている。

稻作農耕と並行して狩獵や漁撈活動も行なわれていたことが、石鎌や弓箭・銛などの存在からうかがえる。今熊野遺跡からはアメリカ式石鎌が数点出土している。

なお東北地方における弥生時代の墳墓は甕棺葬や小堅穴墓が多いが、今回の調査では確実なもののは検出できなかった。

水稻農耕を軸とする生産経済の発展は、単に食生活の変化をもたらしただけではなく、社会の仕組をも変革させ、共同体の中に階級の分化をひきおこしてゆく。次に述べる古墳時代前期での方形周溝墓と集落の方はそれを如実に示すものである。



出土遺物

古墳時代前半

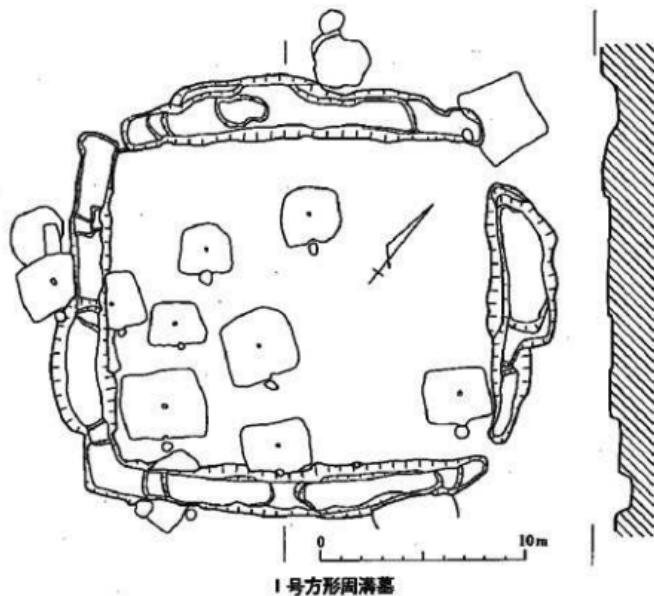
方形周溝墓群

方形周溝墓は弥生時代から古墳時代初めにかけてみられる葬制の一形態である。ここ10年来関東地方以西で数多く発見されつつあり、1遺跡に20基以上みられる例もある。これまで東北地方では例がなく、今熊野遺跡が初めてであり、現在の北限である。

普通は方形に溝をめぐらし、区画した内部に遺体を葬ったと思われる土弧を持ち、高塚古墳のような高い封土を持たない。規模や副葬品から被葬者は、一般民衆ではなく、共同体の中で特定の権力を持った人々が想定され、階級分化の初期の段階の所産として発生したと見られている。方形周溝墓の発見は、当時の葬制に新たな一形態を付け加えたのみならず、これまで謎の多かった弥生時代から古墳時代への移行過程（特に高塚古墳の発生）の解明に大きな手がかりを与えていている。このような点で、今熊野遺跡から発見された方形周溝墓は、単に発見例を北進させたのみならず、東北地方の古墳文化の研究に重要な意味を持つ。

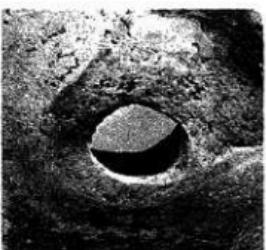
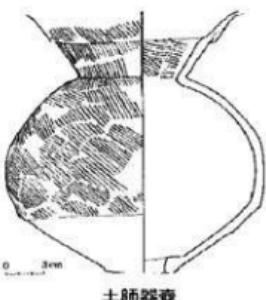
今回発見された方形周溝墓は合計9基で、北台地区から、鴻ノ巣地区西部にかけて連続的にみられ、未調査の部分にもなお多くの存在が予想される。

9基のうち精査を行なったのは4基（1・4・5・6号墓）である。1号墓は、溝の幅を含



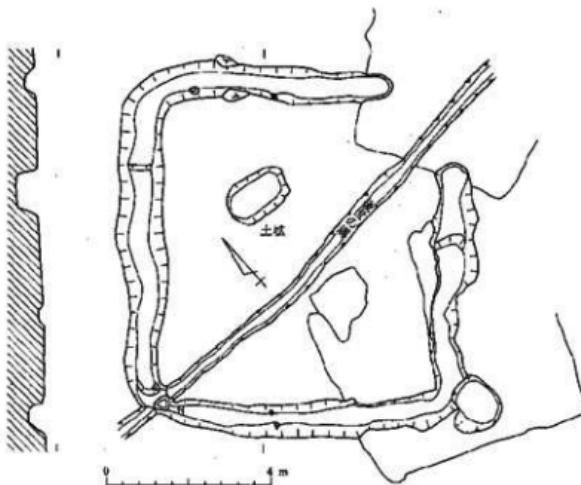


1号方形周溝墓土器出土状態



底部

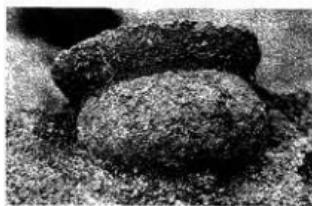
めて1辺21~23mのほぼ方形で、各溝は幅2~3.5m、深さ0.5~1.5mのもので、規模の点で6号墓と類似している。それに対し、4号墓は1辺約8.5mの方形で、溝は幅0.8m、深さ0.7mほどと小形で、5号墓に近い。このように規模の点で2つのグループに分けられるが、両者の違いが何によるかは今後の問題である。(最近、畿内地方などにおいては、方形周溝墓にもいくらか盛り土(封土)があったと推定されるものも発見されているが、本遺跡では、溝中の堆積土の状態からもこの点については不明である。)精査した4基のうち、土塹のみられるのは4号墓のみである。他の3基で確認できなかった原因としては、一般に土塹は周囲の溝より浅いことが多く、本遺跡の各方形周溝墓とも表土下20~30cmのところで確認されており、後世の削平が加えられて破壊されたことや、あるいは縄文時代前期の住居跡と重複する部分が多いことなどが考えられる。4号墓の土塹も、形状は整っているが、出土遺物が全くなく、墓塹断定する根拠に欠ける。しかし、1号墓では、周囲の溝より供獻用と考えられる土器が出土して



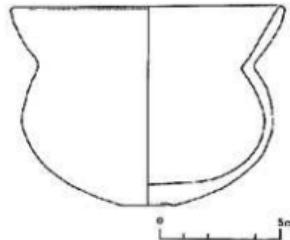
4号方形周溝墓

おり、これらの遺構が墓跡としての性格を明瞭にしている。1号墓の土器は土師器の壺で、合計7個体が溝の埋土より出土し、最初から溝中に置かれたものか、溝外に置かれたものが溝に落ちたのかはなお検討の余地がある。焼成前に底部に穴を開け、実用ではなくして供献用に作られた土器である。土師器は4・6・9号墓からも出土しており、完形品も4、5点みられ、大体が壺であるが、はつきりとした穿孔を認めることはできなかった。

これら今熊野遺跡における方形周溝墓の年代は、各々に多少のずれはあるにしても、出土遺物からみて大体4世紀後半に求められるであろう。



4号方形周溝墓土器出土状態



出土土器

住居跡

古墳時代は、高塚古墳の出現によって特徴づけられているが、その経済基盤は弥生時代を通じて確立した稻作農耕であった。従って、政治的・文化的に大きな変革はあったとしても、それを支えた農民の生活は、徐々に変化していったものと考えられる。殊に前半期にあっては、多くの点で弥生時代と近似する。住居についても同様で、その形態としては、高床式、平地式、竪穴式等が考えられる。前二者は、家屋文鏡や、家形埴輪などで知られるが、遺構としては残存にくく、また上層階級の住居と考えられることから、発見例も少なくその性格を把握することは難しい。これにくらべ、竪穴住居跡は、検出・判定に際しては多くの利点が認められ、庶民の生活を知る上で貴重な資料である。但し、県内では類例が少なく、藏王町大橋遺跡、名取市松崎遺跡、仙台市南小泉遺跡などで知られているにすぎない。

この時期の竪穴住居の一般的な特徴としては一辺が6mほどの方形の平面形を有し、内部にはカマド、炉等の施設をもたずまた、柱穴は4本で、周溝のめぐるものが多い、などが考えられている。規模については、大橋遺跡で一辺10m余の住居跡が発見されたことなどからうかがわれるよう、比較的大形のものであり、又、床面に焼けた部分があり、特に、施設は見られないが、炉的性格をもつものであろう。

今熊野遺跡での発見例は、不明な点の多いこの時期の生活を知る上で貴重であるばかりでなく、古墳の前段階と考えられる方形周溝墓と同時期である点でも大きな意味をもつ。

確認された住居跡は、鴻ノ巣地区に集中し、数多くの存在が予想されるが、調査を実施したのは3軒である。それらの規模形態は、前述の諸特徴と合致するが、その他に壁に沿って柱穴と考えられる小穴が見られる例（鴻ノ巣55号住居跡）などもみられ、上部構造ともからみ合わせ興味深い。

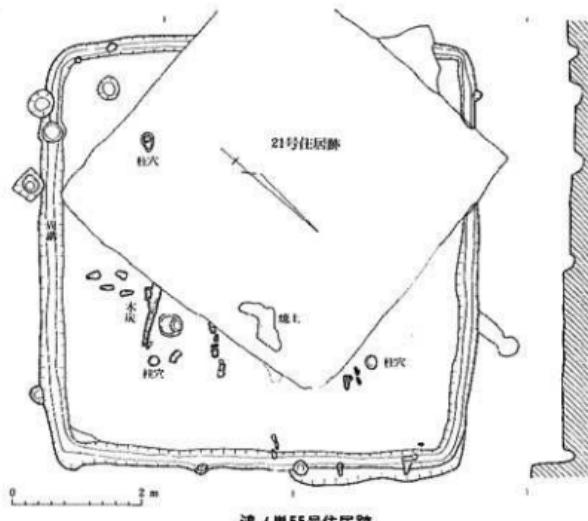
出土遺物は壺、高壺、壺、器台など、土師器である。この時期にはまだ須恵器は用いられていない。大橋遺跡では小片ではあったが鉄器が出土し、その使用を裏付けたが、今回は発見されなかつた。

参考文献

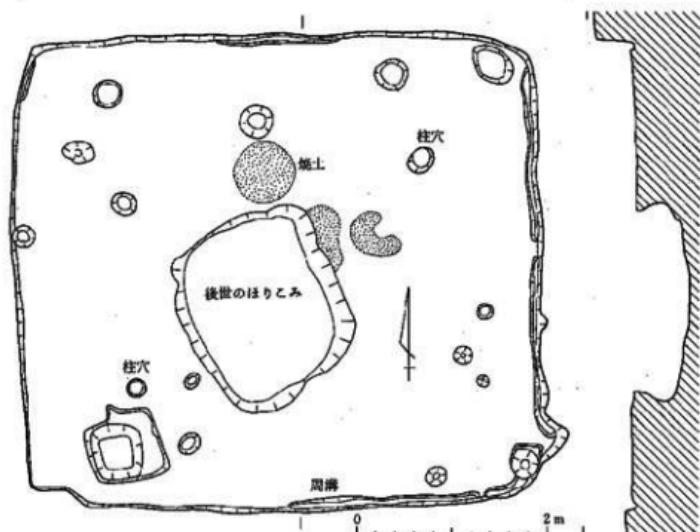
- 伊東信雄 「宮城県古代史」 宮城県史I (昭和27)
藤沼邦彦 「大橋遺跡」 宮城県文化財調査報告書第24集 (昭和46)



鴻ノ巣55号住居跡



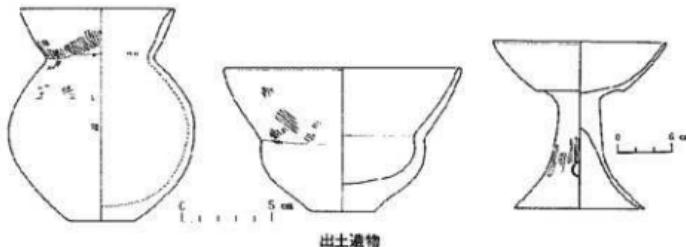
鴻ノ巣55号住居跡



鴻ノ巣15号住居跡

集落と古墳

弥生時代に伝わってきた稻作農耕の技術は、古墳時代に入って定着し、経済生活によく安定を加えてきた。たとえば、藏王町大橋遺跡の古墳時代前期の竪穴住居跡からは、鉄製品が出土しており、鉄製品によって加工された木製農具や鉄製農具の普及をうかがわせる。生産の安定が人口の増加を促し、また人口の増加がさらに生産の増加とそれに伴う耕地の拡大を要求するようになると、人々は、作業を効率的に進めるため、共同体のリーダーのもとで一致して、仕事に当った。このリーダーは、はじめは共同体の単なる代表者であったが、共同体が大きくなり、生産力が増大していくと、次第に祭祀を司どりながら権力を持つようになり、共同体の構成員を支配していく。階級の分化の現象の現われである。このような情勢を示しているのが、今熊野遺跡の方形周溝墓群と、それに伴う集落である。集落は鴻ノ巣地区、つまり台地の低部からだけ発見され、方形周溝墓は集落から仰ぎ見るような北台地区、鴻ノ巣地区の西部といった高台に発見される。住居地域と墓域のはっきりとした区別がなされ、個人の墓としてはあまりにも広すぎる面積をもつ事実は、そこに明らかに支配関係が存在していたことをうかがわせる。このような階級関係はさらに進展し、鴻ノ巣地区的前方後方墳や方墳のように、上に土を盛り上げることによって威儀を増し、造営場所も平野を見晴らす台地の端に作られるようにな



出土遺物



出土遺物

る。これらの古墳の正確な年代は明らかではないが、形態などからみて、方形周溝墓に後続する段階と考えてよいであろう。

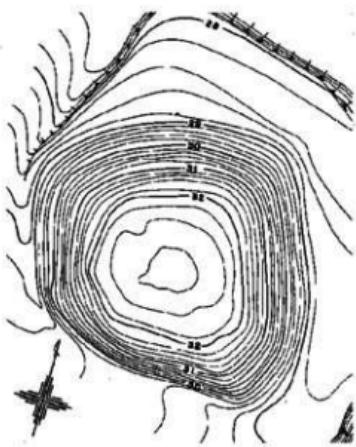
ほぼ同時期とみられる高館山前方後方墳に至っては、標高約130mという名取平野を一望に見下ろす山頂にあり、そこには、共同体の長をはるかに越える強い権力を持つ地方豪族の姿を見ることがある。(注)

このような階級分化は、西暦5世紀頃とみられる仙台市遠見塚古墳・名取市雷神山古墳の造営でさらに顕著になる。

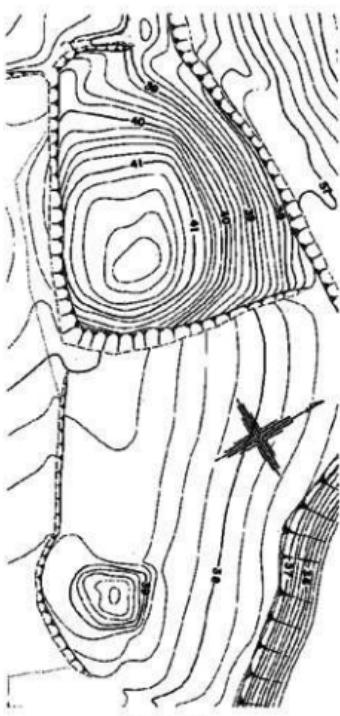
雷神山古墳は、全長167m、東北第一の規模を持つ豪壮なもので、この古墳の造営にあたっては、多くの被支配者が使役させられたことは想像に難くない。もちろん、このような古墳は、畿内地方の影響を受けたものであり、雷神山古墳の被葬者も、中央政権との関連のもとに、この地域の豪族を統合して成立したものと考えられる。このような大古墳の成立のためには、稲作農耕の高い生産力と、それを支えた多くの農民の存在が必要であり、農民の生活の場としての集落が重要な意味をもってくる。

注：高館山前方後方墳：中世の漁跡である高館に近接しており館に伴う施設の一部とする説もある。

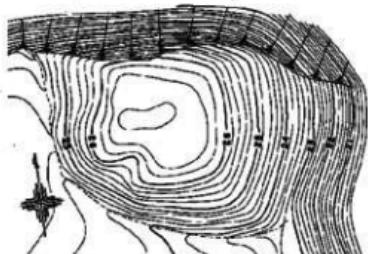
古墳とすれば4世紀末頃のものと考えられ、東北地方において最も古い古墳のうちの一つとなる。



鴻ノ巣1号墳



鴻ノ巣3号墳



鴻ノ巣2号墳

鴻ノ巣古墳群

古墳は、いずれも丘陵の縁辺に占地する高塚古墳である。

1号墳は、底辺の長さ23m、2号墳は底辺の長さ20mの大きさの方墳である。3号墳は、すでに1部開墾されているため変形しているが、長軸45mの前方後方墳とみられる。

今回の調査は、これらにおよばなかったため、内容は不明であるが、墳丘の状態から推して5世紀ごろの築造とみられる。

方形周溝墓との関連などについても確かめられていない。



鸿ノ里 1号墳

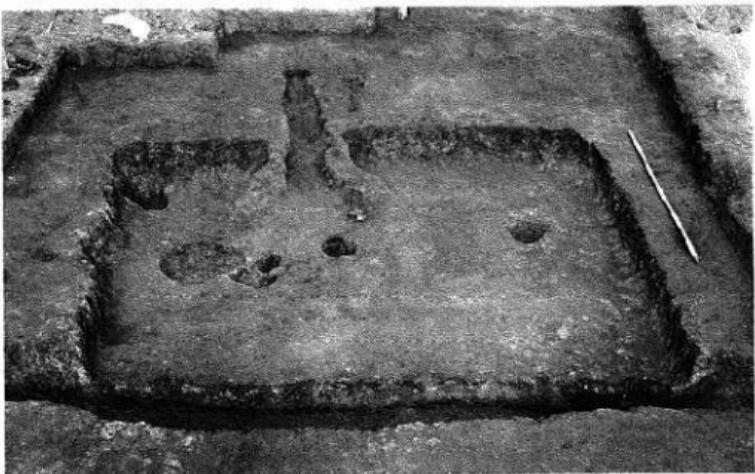


鸿ノ里 2号墳



鸿ノ里 3号墳

古墳時代後半



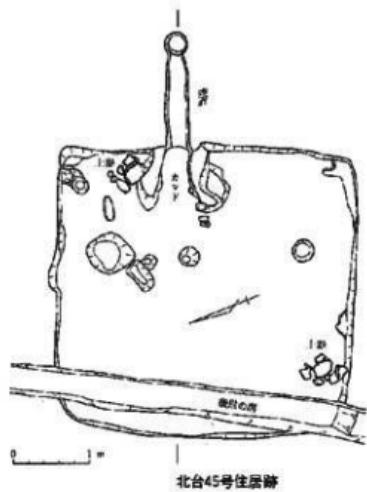
北台45号住居跡

東日本ではこの時期に遺跡数が急激に増加し、また立地の多様化がみられ、沖積平野、台地の周縁部から奥部へと広がる。生産と集落構成に変化が現われ、集落に水田經營が定着するとともに、畑作經營が進展する。鉄製農耕具の普及は、これを裏づけるものであろう。

住居の形態は、西日本では平地住居がしたいに増加し、それとともに土製のカマドと土釜、籠の炊飯用具を伴う堅穴の形態を残したカマド家が住居から分離していく例が知られる。

東日本では依然として堅穴住居が大半を占め、内部施設としてカマドの出現が特徴的であり、東北では長い煙道がつく。炉はしたいになくなる。このカマド出現の原因や、また、それが家屋の構造や生活内容に及ぼす影響などについては、現在不明な点が多い。カマド発生の時期は、関東地方では大体5世紀末から6世紀前半とされるが、東北地方では多少遅れる。

今熊野遺跡では、この時期の堅穴住居跡が現在6軒確認されている。鴻ノ巣地区の南斜面に2軒、北台地区の平坦面から東斜面へかけて6軒あり、前時期の方形周溝墓群のつくられたところまで新たに居住区域が広がっている。また北台地区の6軒の中には、分布状況からみれば、2、3軒のまとまりもみられるが、個々の住居跡の詳しい年代決定がなされていないので、明確な判断はできない。



北台45号住居跡



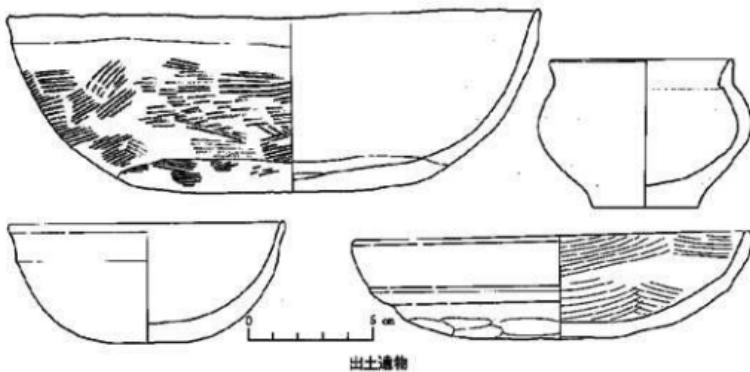
浦ノ郷35号住居跡

平面形はやや長方形で整ったものが多く、隅は多少丸味を帯びる。規模は不明な住居跡もあるが、大体一辺が4~5mで、カマドが西から北（ほぼ斜面の上）を向くが、1軒のみ東を向く。カマドは粘土構築で、内部は底面から側面にかけては焼けて赤変し硬い。天井部は崩れ、残っていない。カマド奥壁から煙道が伸び、先端には煙出しの穴がつくことが多い。煙道はトンネル状に地面をくり抜いたものと思われ、天井部が一部残っているものもあるが、多くは崩れて溝状を呈する。床面は比較的軟らかく、柱穴は不明な場合が多い。鴻ノ巣35号住居跡では、周辺幅1mほど、床面下に深い掘り込みがみられる。壁直下にめぐる周溝はないものが多い。

今熊野遺跡の6軒のうち鴻ノ巣35号住居跡は他の5軒と形態的に異なる点をいろいろ持っている。床面は硬くしまって細かな凸凹がみられ、周溝がめぐる。柱穴も4本明確にみられ、カマドの右に貯蔵穴がある。

住居跡から発見される遺物は土師器と須恵器である。土師器は長胴のカメと壺に大別される。高壺は少ない。長胴のカメは、カマドの出現の伴って現われるとされている。実際に使用される時にはカマドの上部から差し入れて下を支脚などで支え、これだけでも炊飯の用を果たし得るが、カメの上にさらに「甑」という底に穴のある小形の土器を乗せて蒸すこともあった。壺は体部に段のつくのが特徴的で、内面はヘラなどでみがかれた後、黒色処理されている。食器など日用雑器である。須恵器には、大ガメや壺などの器形がみられるようであるが、土師器より数も少なく、この点西日本とは大きな違いを示す。

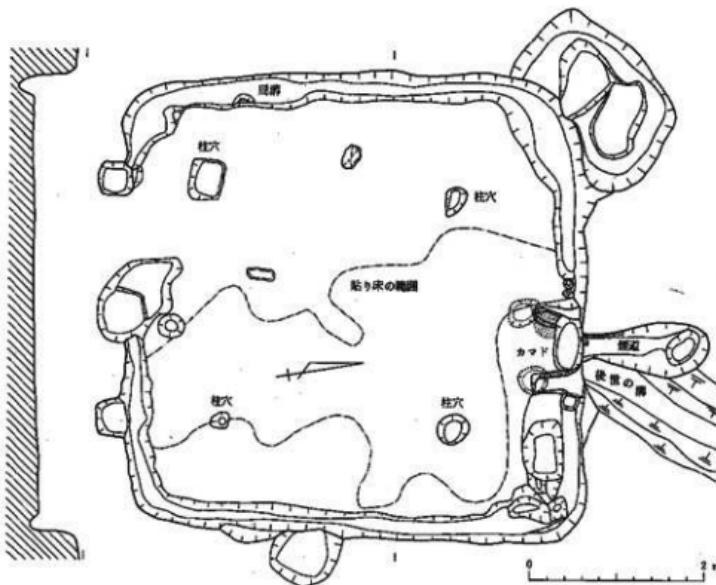
東北地方では古墳時代後半は、5世紀後半から8世紀ごろまでとされるが、本遺跡で発見されたこれらの遺物は大体7世紀後半から8世紀ごろのものと思われる。また東北地方の7~8世紀の土師器、須恵器については現在不明な点が多い。



歴史時代

この時代は、律令制が人々を強く支配していた時代である。この体制のもとで、一般的農民、土器つくりの工人、海辺では漁業や製塩業に従事する人々など、分業体制はさらに進展していくと考えられる。性格は異なるが多賀城跡では兵士の居住した兵舎と考えられる住居も発見されている。このように住居のもつ意味には違いが考えられるが、形態に大差なく、既に官衛や寺院跡などでは大規模な建築が行なわれているにもかかわらず、庶民の生活は依然として竪穴住居であり、そこに支配者と被支配者の厳然たる相違を見ると同時に、税（租・庸・調）などのとりたてにより暮しは決して楽なものではなかったと思われる。また、戸籍の作成により、集落の体制が整備されていたことが考えられるが、一つの集落全体を調査した例がなく明らかでない。この時期の住居の調査で数多く発見されている墨書き土器は、このことの解明の手がかりとも考えられている。

住居は前代に比し斉一性の傾向がみられる。集落全体の調査はないが、発見例は多くそれによると規模は一辺5m前後に整った正方形に近く、カマドは石組のものが多くなり脇に貯蔵穴



鴻ノ巣13号住居跡



鴻ノ巣21号住居跡

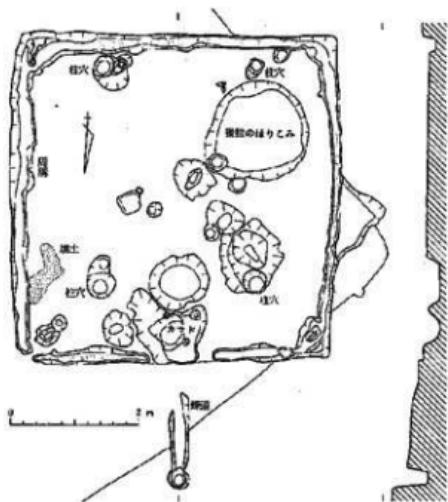
が付属するのが一般化する。また、柱穴は不明な場合が多く、このことは住居の構造との関連もあり、原因は不明である。

今熊野遺跡では、調査を行ったのは2軒であるが、遺構確認状態からみるとなお多数の存在が予想される。2軒とも鴻ノ巣地区南斜面につくられたもので、煙道は北側にのびる。カマド部分は破壊されており不明な点が多いが、柱穴は4本づつ発見され、この時期としては数少ない発見例に含まれる。

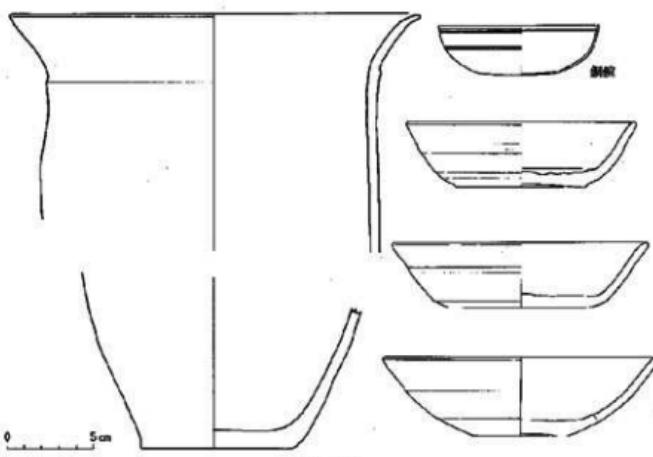
関東地方ではこの時期になると貯蔵穴は姿を消し、また住居の数も減少する現象が知られており、今後に残された問題であろう。

出土遺物は土師器、須恵器が大半を占めている。土師器は主にカマドに付属して用いられる胴の長いカメと食器その他日用雑器としての壺などの器形がある。須恵器は大ガメと壺である。また鴻ノ巣13号住居跡から銅製の鏡が出土した。県内では岩出山町川北横穴群から1例出土しているが、住居跡からは珍しく、注目される。

註：この項で述べた歴史時代とは、ロクロ成形し、底部に回転捺切痕が付けられた。内面黒色土師壺によって特徴付けられる時代であって、9世紀以降、平安時代を指す。前項において、古墳時代後半としたものは、奈良時代7世紀末、8世紀初頭に位置づけられており、この二者の間隙をうめるものとして、築部町伊台物跡、志波姫町藤塚遺跡が考えられるが不明な点が多い。



油ノ瀬21号住居跡



出土遺物

まとめ

今回調査した金剛寺貝塚・今熊野遺跡については、まだ整理が十分でないため、細かな点については述べることはできない。それでも数多くの事実と問題点を提示することができた。

金剛寺貝塚においては、正確な遺跡の範囲を把握し、その中で住居地域・貝塚地域という集落内においての地域の使いわけを指摘できた。これは縄文時代の貝塚を伴う典型的な集落といえる。

このことは今熊野遺跡についてもいえることである。台地全体の調査ではないので正確な規模については不明であるが、59軒の堅穴住居跡は今の所、縄文前期としては、我国最大のものである。また、地点を異にして土塙群があり、さらに包含層が斜面に形成されている。縄文前期という時期は、大きな集落が形成されはじめる時期であり、今後の整理によっては、集落のあり方や、集落を構成する住民の構造などが解明され、縄文時代の集落研究にとって大きな資料を提示するものであろう。

今熊野遺跡では、さらに古墳時代、歴史時代に及ぶ大集落が発見されている。特に古墳時代前半のものは9基の方形周溝墓を伴う。方形周溝墓は、東北地方では初めて発見され、かつ現在のところ北限のもので、この発見により、この地方の古墳文化が大和朝廷の政治的支配によって突如として出現したものではなく、徐々に進んでいたことが明らかになった。更にこれに伴う集落が発見されたため、墓と集落の関係や被葬者の性格等と、考えるべきことは多い。

古墳時代後半、歴史時代の集落も調査したものは少いが、多くの住居が含まれていることは確実である。ことに8世紀以降は既に律令体制にくみ入れられていたと考えられ、当時の支配体制をも明らかにする資料となろう。

このように今熊野遺跡は、その中に大規模かつ数多くの内容を包含している。

今回は整理も十分でないため、このような重要な内容をもつ両遺跡を通じて、各時代の概要とその中にどのように遺跡が位置づけられるかに焦点をあてた。しかしながらそれぞれの時期の把握に精粗があり、統一を欠いてしまったことは否めない。その点については、今後各方面的御協力と御教示を得て、提示された問題点に具体的な根拠を与えながら検討と吟味を重ね、報告書を作成するつもりである。

